

学会印象記

第35回日本DDS学会学術集会

会期：2019年7月4日(木)～5日(金)
会場：パシフィコ横浜アネックスホール(横浜市)
大会長：濱口 哲弥(埼玉医科大学国際医療センター消化器腫瘍科 教授)

城 潤一郎

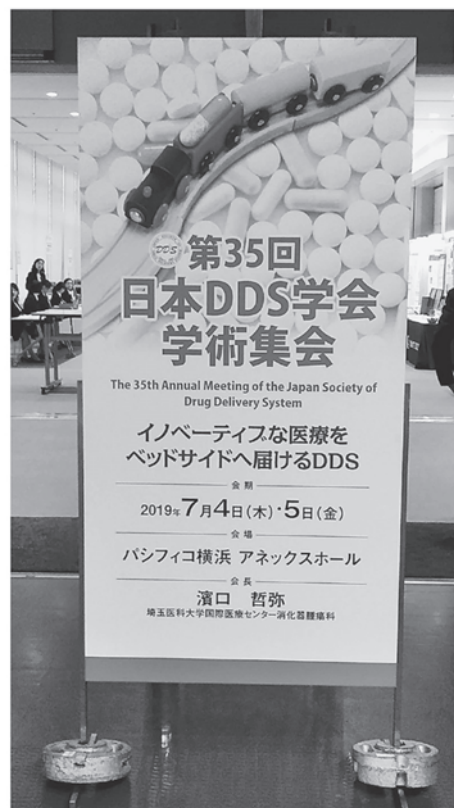
京都大学ウイルス・再生医科学研究所生体材料学分野

第35回日本DDS学会学術集会が、2019年7月4日～5日、パシフィコ横浜で開催された。埼玉医科大学国際医療センター消化器腫瘍科教授の濱口哲弥先生が大会長を務められた。DDS(ドラッグデリバリーシステム)とは、必要な薬物を必要な時間に必要な部位で作用させるためのシステム(工夫や技術)であり、これを実現し応用していくには、薬学、工学、臨床医学、企業といった非常に多岐にわたる分野の融合が必要である。日本DDS学会は、創立(1984年)当初より、その分野融合を具現化してきた学会であり、年に1回学術集会が行われている。本学術集会は、35回目にあたり、約820名が参加した。

今回の学術集会では、2件の特別講演があった。1件目は、国立がん研究センターの中釜 斉理事長・総長であった。“がんゲノム医療元年：日本のがん医療の進むべき方向性について”と題して、個体間で極めて多様で複雑なゲノム異常を呈するがんに対する医療の方向性について講演された。特に、個々のがん細胞のゲノム情報を基にがん治療の最適化を目指すがんゲノム医療について、今年度より保険診療下でのがんの遺伝子パネル検査が可能となったことなどが紹介された。また、今後のがん医療の進展のために望まれる技術についてもお話され、非常に有意義であった。2件目の特別講演では、Seattle GeneticsのPeter Senter博士が、“Potent Antibody-Based Conjugates for Cancer Therapy: From Early Stage Research to a Clinically Approved Drug”と題して、最近注目を集めているがん治療のための抗体-薬物複合体について、基礎研究

から臨床応用までの話があった。

DDSの研究・開発の範囲は、非常に多岐にわたる。本学術集会では、「経皮、経粘膜、経肺におけるDDS」、「ナノ粒子型DDSの最先端」、「核酸医薬とDDS」、「再生医療分野で必要となるDDS技術」、「抗体デリバリー」、「分子イメージング」、および「コントロールド



第35回日本DDS学会学術集会の看板